

# 青年期における被害意識と加害意識の関連性

鈴木 乙 史

#### The relationship between Higai Ishiki and Kagai Ishiki in adolescence—————

*Kagai Ishiki* is the delusive idea of offending others and thus being rejected by others because of some self-perceived personal fault (such as body odor or bad breath). *Higai Ishiki* is the delusive idea of being offended by others and thus rejecting others because of their personal faults.

Clinicians see these ideas as two sides of the same coin, called *Taijin Kyofusho* (anthropophobia : a fear of interpersonal relations). However, little empirical research has been conducted on the relationship between these two types of ideas. This study examined the relationship between *Kagai Ishiki* and *Higai Ishiki* and identified some of the psychological and interpersonal factors related to these ideas. The subjects were 227 college students. This age group was selected because adolescents are at a critical developmental stage in terms of interpersonal relations.

A multiple regression analysis showed that *Kagai Ishiki* and *Higai Ishiki* coexisted in the subjects. The results also indicated that a significant reinforcement existed between these two types of ideas. However, most subjects were more afraid of being offended by others than of causing offense. In other words, the idea of *Higai Ishiki* was generally much stronger than *Kagai Ishiki*. The reverse scenario, where the fear of offending was stronger, was seen in only a few students. The study identified additional factors that enhanced both these fears. In particular, subjects with a higher “trust for self” tended to show much stronger *Higai Ishiki*. Conversely, those with a lower “trust for self” tended to show much stronger *Kagai Ishiki*.

## 1, 問 題

本研究は、現代青年の持つ被害意識と加害意識について、実証的な検討を行うことを目的にしている。現代青年、特に高校生・大学生は一般的と言えるような広がりをもって、かなり明確な被害意識と加害意識を持つようにみえる。鈴木（2000）は高校生を対象として、彼らの体臭や口臭、目つきや表情に対する被害的な意識と加害的な意識について調査し、その実態と両意識に関連する心理的要因について報告した。また、青年期の被害意識と加害意識を、対人恐怖症の重症例とされる自己臭恐怖に焦点をあてて論じている（鈴木、2005）。

田中（1993）は、近年の対人恐怖症研究では、対人恐怖症の基本的特徴として加害意識の持つ意義が強調されていることを指摘している。また多くの臨床家が、対人恐怖症例に認められる加害意識と被害意識の両面性を指摘している。たとえば、宮本・鬼澤（1985）は「対人恐怖では、加害性と被害性がほとんど常に並存する」（p. 53）と指摘し、内沼（1985）は「被害性と加害性の両面から成り、自と他が仮面の背後に不可解な破壊性を隠しもって相互に対峙しあっている」（p. 111）と記述している。しかしながら、この両意識の関連性を実証的に検討した研究は現在に至るまでほとんどみられていない。ただ、田中（1993）においてのみ、両意識の現れ方が対人恐怖9症例で検討されているだけである。ここでいう被害意識とは、「他者（周囲）によって、自分が嫌な思いをする、させられる」という意識であり、加害意識は逆に「自分によって、他者（周囲）が嫌な思いをする、させられる」という意識である。

特に自己臭恐怖は、「自分の体から不快な臭いが出て、周囲の人に嫌な思いをさせていると確信する症状」（宮岡・阿部、1990）であり、対人恐怖症の中でも重症ケースにみられる症状、または境界例（ボーダーライン人格障害）と考えられている（笠原ら、1984；中里、1986；西園・井上、

1998)。ところで、「自分の体から不快な臭いが出て、周囲の人に嫌な思いをさせている」と訴えるクライアント（来談者）の苦悩をよく聴いていくと、体臭そのものよりも、それが漏れでて他者を不快にし、その結果他者から嫌われ避けられ、対人関係をそこねてしまうという点に苦悩の中核があるという（笠原ら、1984）。すなわち、加害的な自己が意識化され、それが漏れ出てしまい、そのために他者（周囲）から排除されるという恐れである。この観点は、自我漏洩感研究として、いくつかの報告がなされている（藤縄、1972；佐々木・丹野、2005）。

しかしながらこのような加害的・被害的心性は、現代日本において病的な水準から一般的な水準まで、多様な形で社会に共有されていると考えられる。例えば、「くさい」という言葉は、ギャグまたは他者に対する非難の言葉として、場面に不適切な発言に対して浴びせられる言葉であり、テレビのバラエティ番組から若者の日常的会話にいたるまでしばしば用いられている。さらに、この「くさい」という言葉は、小・中学校などのいじめにおいて、他者を傷つけ、集団から排除する際にしばしば用いられる言葉でもある。体臭や口臭に対する気遣いは、ある面では社会的なエチケットの一つと考えられるが、現代日本の青年が気遣う水準はそれを越えて、自分の体臭や口臭が、他者を嫌な気持ちにさせ（加害感）、自分が他者から嫌われ、他者から排除されるという恐れから由来し、高まっているように思える。このことは翻って、同時に他者の体臭や口臭が自分を嫌な気持ちにさせ（被害感）、そのことにより他者を排除するような傾向を、自己の中に内包していることも示唆している。臭いに対する過度の気遣いは、異質な者として他者から排除される恐怖と、他者を排除する自己の攻撃性や敵意などの意識に関連しているように思える（鈴木、2005）。また、日本人に多いとされる赤面恐怖や視線恐怖といった青年期の対人恐怖症には、目つきや表情などに対する被害意識と加害意識が存在すると考えられる。このように自己や他者に関して、被害意識や加害意識を形成しうる側面は数多くあり、それぞれの被害感と加害感とは強く結びついていると思

われる。また同時にそれらの側面のうちには、被害感と加害感が同程度でズレが少ないものと、ズレが大きいものがあると考えられる。同程度でズレが少ないものは、いわばお互い様であり社会的にも許容されやすい側面であると考えられるが、ズレの大きい側面は一方的なものと感じられ許容されにくく、それゆえ苦悩の源になりうるものと考えられる。すなわち、加害意識とは、自己の認知する何らかの欠点（体臭や口臭など）によって他者を嫌な気持ちにさせてしまい、それゆえ他者から排除されてしまうのではないかと恐れる妄想的な考えであり、被害意識とは他者の欠点によって自己が嫌な気持ちにさせられ、それゆえ他者を攻撃的に排除してしまうのではないかと恐れる妄想的な考えである。

本研究では、現代青年における被害意識と加害意識の実態と相互関係、そして両意識はどのような心理的・対人的要因と関連しているかを明らかにすることを主たる目的とする。これらの問題を、ライフサイクルのなかで最も自己・他者関係に敏感であると考えられる大学生を対象として検討する。

## 2, 方 法

### (1) 対象者

首都圏の私立大学2校に通う大学生、230名を対象として質問紙調査を行った。そのうち必要な回答が大きく欠けている者や明らかに真面目に答えていない者3名を除いて、227名（男子91名、女子136名）を分析の対象とした。有効回答率は98.7%であった。

### (2) 手続き, 調査日時

2011年11月にそれぞれの大学の心理学の授業時間を使って、配付し、記入してもらい、回収を行った。

### (3)質問紙の構成

#### 1) 被害意識尺度, 加害意識尺度

鈴木(2000)で用いられた尺度を用いた。これは青年期の被害意識・被害意識を測定する目的で作成されたもので、項目はUPI, MMPI, 対人不安意識尺度(林・小川, 1981)などを参考にして構成されている。被害意識尺度および加害意識尺度は、ともに12項目から構成されている。尺度項目は表1に示されている通りである。項目内容から明らかのように、本尺度は、嫌な気持ちにさせられる、嫌な気持ちになるといった、感情面に焦点が当てられている尺度であり、それによって排除する、排除されるといった恐れの側面には焦点が当たっていない。

#### 表1, 被害意識項目

1. 他者の話し声が、自分をいやな気持ちにさせるときがある
2. 他者の行動が、自分をいやな気持ちにさせるときがある
3. 他者にジーと見られて、いやな気持ちになるときがある
4. 他者の体の匂いが、自分をいやな気持ちにさせるときがある
5. 他者のイヤな表情が、自分をいやな気持ちにさせるときがある
6. 他者の目つきが、自分をいやな気持ちにさせるときがある
7. 他者の髪の毛の匂いが、自分をいやな気持ちにさせるときがある
8. 他者の顔つきが、自分をいやな気持ちにさせるときがある
9. 他者の話し方が、自分をいやな気持ちにさせるときがある
10. 他者の体形が、自分をいやな気持ちにさせるときがある
11. 他者の口臭が、自分をいやな気持ちにさせるときがある
12. 他者の性格が、自分をいやな気持ちにさせるときがある

\*注：加害意識項目は、「1. 自分の話し声が、他者をいやな気持ちにさせるときがある」というように、他者と自分を入れ換え相互に対応するように用語を変化させた。

2) 被害意識・加害意識と関連すると思われる心理的・対人関係的変数

①敵意的攻撃尺度（秦, 1990）から, 第2因子の敵意10項目を採用した。この因子は, 人から嫌われているとか, 不公平な扱いをされているとか, 他者に対する恨みや疑惑を示し, 「私のまわりには, 気に入らない人が多い」など10項目から構成されている。他者に対する敵意的な思いの程度を測定する。

②自意識尺度（菅原, 1984）から, 下位尺度である公的自意識尺度, 私的自意識尺度を用いた。私的自意識尺度は, 「ふと, 一步離れた所から自分をながめてみることもある」などの10項目から構成され, 自己の内面や感情・気分など, 他人からは直接観察されない自己の側面に注意を向ける傾向の程度を測定している。これに対して, 公的自意識尺度は, 「人の目に映る自分の姿に心を配る」などの11項目から構成され, 自己の服装・髪形や他者に対する言動など, 他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける傾向の程度を測定している。

③精神病的傾向尺度（町沢・佐藤, 1991）。この尺度は, ボーダーライン人格障害の下位分類の試みから生まれた下位尺度で「私の内面は空虚だと思ふ」などの3項目から構成され, 自己の空虚感や現実と非現実間の不明確さを特徴とする精神病的傾向を測定している。

④信頼感尺度（天貝, 1995）から, 不信因子, 自分への信頼因子, 他人への信頼因子を用いた。不信因子は, 「今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれない」などの10項目から構成されている。自分への信頼因子は「私は自分自身を, ある程度は信頼できる」などの6項目から構成されている。他人への信頼因子は, 「これまでに会ったほとんどの人は私によくしてくれた」などの8項目から構成されている。これらの因子によって, 信頼感を測定する。

⑤精神的回復力尺度。小塩他（2002）の精神的回復力尺度（3因子）から, 因子負荷量の大きな順に各5項目, 計15項目を選んだ。下位尺度は, 新奇性追求因子, 感情調整因子, 肯定的未来志向因子である。

⑥コナー・デビッドソン・レジリエンス尺度 (CD-RISC) を用いた。Conner, K. M. & Davidson, J. R. T. (2003) によって作成された The Conner-Davidson resilience scale(CD-RISC) は、25 項目から構成されている。加藤・八木 (2009) の日本語訳を参考に、日本語版を作成した。以上の尺度・因子の評定はすべて 5 件法で行い、「5. あてはまる」から「1. あてはまらない」までの数値を与えた。それゆえ、数値が大きいほどその傾向が高いことを示している。

### 3, 結果と考察

#### (1), 被害意識, 加害意識そして両意識のズレ

被害意識と加害意識の平均と標準偏差, そして両者のズレの大きさは, 表 2, 図 1 に示した通りである。

表 2, 被害意識と加害意識の平均値, およびズレ得点

	被害意識 M (SD)	加害意識 M (SD)	ズレ得点
Q201 話し声	3.67 (1.19)	3.21 (1.17)	0.489
Q202 行動	4.00 (0.98)	3.70 (1.16)	0.302
Q203 見られて	3.41 (1.28)	2.84 (1.26)	0.568
Q204 体臭	3.82 (1.13)	2.56 (1.14)	1.261
Q205 表情	4.10 (1.05)	3.48 (1.13)	0.619
Q206 目つき	3.68 (1.20)	2.99 (1.29)	0.692
Q207 髪の毛の臭い	3.04 (1.35)	2.31 (1.09)	0.730
Q208 顔つき	3.38 (1.30)	2.94 (1.16)	0.436
Q209 話し方	3.88 (1.18)	3.39 (1.17)	0.493
Q210 体形	2.27 (1.31)	2.27 (1.13)	0.000
Q211 口臭	3.63 (1.26)	2.71 (1.12)	0.925
Q212 性格	4.20 (0.89)	3.62 (1.13)	0.577
全体平均	3.59 (0.77)	3.00 (0.83)	0.590

\*ただし, ズレ得点は, 被害意識平均値 - 加害意識平均値で算出した。



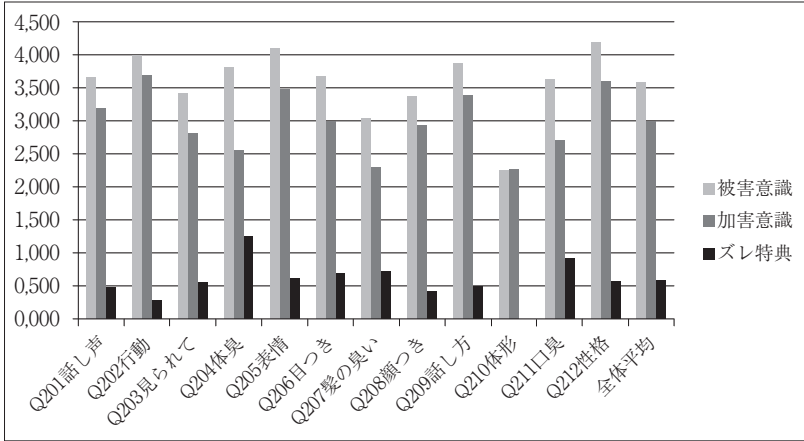


図1, 被害意識・加害意識の平均値と両意識のズレ

注) 被害意識・加害意識は1から5までの値であるが, ズレの大きさを同時に示すために, 0から図示している

被害意識の平均値は, 全体が, 3.59 (SD = 0.77), 男子は, 3.49 (SD = 0.75), 女子は, 3.66 (SD = 0.77)であった。検定の結果 ( $t = 1.62$ ) 性差はみられなかった。

加害意識の平均値は, 全体で, 3.00 (SD = 0.83), 男子は, 2.93 (SD = 0.89), 女子は, 3.06 (SD = 0.78)であった。同じく性差はみられなかった ( $t = 1.18$ )。

鈴木 (2000) では, 同じ尺度を用いて高校生 ( $n = 207$ , 男子 93名, 女子 114名) の被害意識・加害意識を測定しているが, その結果は, 被害意識の全体が 3.53 (SD = 0.64), 男子 3.46 (SD = 0.64), 女子 3.60 (SD = 0.63)で, 大学生の結果とほぼ同じであったが, 加害意識では全体 3.15 (SD = 0.68), 男子 3.09 (SD = 0.73), 女子 3.19 (SD = 0.64)と, やや高校生が大学生よりも加害意識が高いことが示唆された。

被害意識, 加害意識共に, 全体平均では性差が見られなかったが, 項目毎に性差を検討したところ, 被害意識では, 12項目中2項目 (「ジーンと見

られる」「イヤな表情」)で1%水準の有意差が見られ、女子の方が男子よりも被害意識が強かった。加害意識でも同様に、女子の方が男子よりも、2項目(「話し声」「イヤな表情」)でそれぞれ5%水準と1%水準で有意差が見られ、加害意識の強さが見られた。

被害意識と加害意識との平均値間の差(ズレの大きさ)を検討すると、項目10「体形」を除いた11項目に0.1%水準の有意差が見られた(表2)。また項目10「体形」を除いたすべての項目で、被害意識が加害意識よりも高かった。項目10「体形」は、加害意識と被害意識の平均値が同得点であり、ズレ得点は0となった。

ズレ得点の大きな項目は、大きなもの順に、項目4「体の臭い」(1.26)、項目11「口臭」(0.93)、項目7「髪の毛の臭い」(0.73)であった。このように臭いに対する意識は、被害意識と加害意識の間に大きなズレがあり、一方的に被害的と感じられていることが分かる。このような一般的なあり方の中で、自己に対して加害的な疑念を持たば、加害意識は一層強く感じられ、それゆえ他者から排除されるかも知れないといった神経症的な不安に発展しかねないであろう。

次いでズレ得点の大きなものは、項目6「目つき」(0.69)、項目5「表情」(0.62)であった。これらは、視線恐怖や赤面恐怖と関連しやすい側面である。これらも一般には被害意識がより大きい側面である。

逆にズレが少ないものは、既述の項目10「体形」(0.00)、および項目2「行動」(0.30)、項目8「顔つき」(0.44)であった。これらは個人の属性であり、またお互い様として許容されやすい側面と考えられる。

## (2) 被害意識、加害意識の因子分析

すでに述べたように、やや女子の方が男子よりも両意識が強いことが示唆されるが、全体では性差が見られないことと、有意差が見られるのは、12項目中2項目のみであるため、男女合わせて因子分析を行うこととした。

主因子解による因子分析を行い、固有値のスクリープロットを検討した

ところ、被害意識と加害意識はともに固有値 1 以上の因子はひとつだけであった。被害意識では、第 1 因子の固有値が 4.59、寄与率は 38.28%であった。12 項目全体でクロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ、0.875 と十分な信頼性が得られた。また、加害意識では、固有値 5.58、寄与率 45.53%であった。同様に  $\alpha$  係数は、0.910 と十分な信頼性が得られた。それゆえ、それぞれ 12 項目全体の平均得点を被害意識と加害意識の程度とした。得点の高さはそれらの傾向の高さを示している。

### (3) 被害意識、加害意識と他の変数との関連（重回帰分析）

被害意識と加害意識をそれぞれ目的変数とし、他の変数を説明変数とした重回帰分析を行った。被害意識を目的変数とした場合、説明変数は、加害意識、公的自意識、私的自意識、自己信頼感、他者信頼感、不信感、敵意、精神病的傾向、精神的回復力の全体と下位 3 因子（新奇性追求、感情調整、肯定的未来感）、コナー・リジリエンス尺度の合計 13 変数である。また、加害意識を目的変数とした場合には、説明変数は被害意識と他の 12 変数の合計 13 変数である。

結果は、被害意識の重回帰分析では、重相関係数 (R) は、0.572 ( $F = 21.44$ , 1%水準で有意)、決定係数 ( $R^2$ ) は、0.327 であった。有意な標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) を示した変数は 4 つあり、1%水準で、加害意識 ( $\beta = 0.330$ )、自己信頼感 ( $\beta = 0.294$ )、敵意 ( $\beta = 0.300$ )、そして 5%水準で精神病的傾向 ( $\beta = 0.123$ ) である。このように、被害意識を規定する要因として、加害意識、自己信頼感、敵意、精神病的傾向の高さが寄与していることが示された。また、加害意識の重回帰分析では、重相関係数 (R) は、0.573 ( $F=17.94$ , 1%水準で有意)、決定係数 ( $R^2$ ) は、0.329 であった。有意な標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) を示した変数は 4 つあり、1%水準で被害意識 ( $\beta = 0.355$ )、5%水準で自己信頼感 ( $\beta = -0.153$ )、不信 ( $\beta = 0.157$ )、精神病的傾向 ( $\beta = 0.129$ ) である。このように、加害意識の強さを規定する要因として、被害意識、不信、精神病的傾向の高さと自己信頼感の低

さが寄与していることが示された。

以上の結果から、被害意識と加害意識は、ほぼ同程度の標準偏回帰係数で相互を規定していることが分かった。先行研究からは、対人恐怖症の症例研究（田中，1993：宮本・鬼澤，1985：内沼，1985）などによって、加害意識と被害意識の並存についての言及がなされていたが、実証的データからも加害意識の背後には被害意識が、また被害意識の背後には加害意識が存在することが明らかになった。ズレ得点の分析からは、並存する両意識のうち、一般的には被害意識が図となって意識化されていると考えられる。しかしながら、少数ではあるが加害意識の方が図となって意識化されている者がいると考えられる。

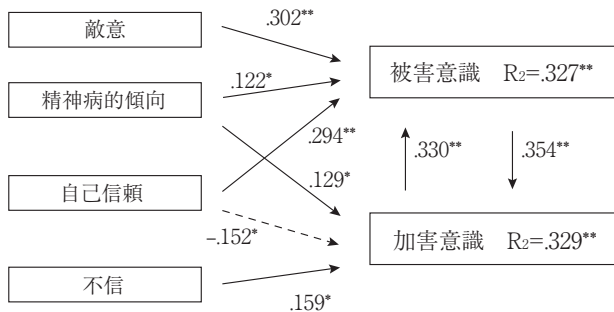


図2，重回帰分析結果のパス図

(ただし、矢印の実線は正の $\beta$ 係数を、点線は負の $\beta$ 係数を示す)

\*  $\dots p < .05$ , \*\*  $\dots p < .01$

注) 被害意識，加害意識それぞれを目的変数とした2つの重回帰分析結果の合成図

また、被害意識を強める要因として、自己信頼感がある。自己のあり方を信頼できる者は、自己が他者に対して加害的でありうることを意識せずにするのであろう。逆に自己信頼感の低さは加害意識を強める要因であり、自己を信頼できない者にとっては、自己が他者へ加害的でありうるという

疑念を否定できないのであろう。自己信頼感が、両意識に対して逆に働くというこの知見は興味深い。

なお被害意識を強める要因として、敵意の強さと精神病的傾向がある。他者に対する敵意と、自己の空虚感や現実と非現実の不明確さを中心とする精神病的傾向の高さは、被害意識を強めている。また、加害意識を強める要因として、自他に対する不信感と精神病的傾向の高さがある。このような、敵意や不信感、精神病的傾向が被害意識、加害意識を強めるということは了解しうると思われる。なお、公的自意識と私的自意識はともに被害意識と加害意識には関連性がみられなかった。また、本研究では2種類のレジリエンス尺度（精神的回復力尺度、コナー・デビッドソン・レジリエンス尺度）を用いたが、被害意識と加害意識の両方ともに関係性が示されなかった。このことは興味深い結果であり、今後の検討課題であらう。

#### (4) ズレ得点の3群比較（分散分析）

ズレ得点は、平均値の高い被害意識から低い加害意識を引いて算出している。ズレ得点の平均値は0.59、標準偏差は0.84、最大値3.50、最小値-1.83であった。平均 $\pm$ 1/2 SDを基準として、ズレ得点の高群（H群、N = 68、M = 1.59、SD = 0.43）、中群（M群、N = 79、M = 0.60、SD = 0.22）、低群（L群、N = 80、M = -0.27、SD = 0.44）の3群を分けた。H群は、被害意識が相対的に高く意識化されている被害認知群、L群は加害意識が相対的に高く意識化されている加害認知群と考えられる。M群は中間群である。

これら3群間でどのような変数に差が見られるか、一元配置分散分析を行った。その結果、3群間で有意差が見られた変数は、自己信頼感、他者信頼感、CD-RISC尺度であった。多重比較の結果から、自己信頼感では、L<H、M<H、他者信頼感では、M<H、CD-RISC尺度では、M<Hに5%水準の有意差が見られ、いずれの変数でも被害認知群（H群）が他の2群に比べて、自己信頼感、他者信頼感、レジリエンスのいずれもが高く、い

わば適応的であることが示された。L群とM群との間では、有意差が見られた変数はなかったため、被害認知群（H群）のみの特徴が際立つ結果となった。

## (5) 考察

対人恐怖症の症例だけでなく、一般の大学生の心性においても被害意識と加害意識は存在するだけでなく、相互に強め合っていることが重回帰分析の結果から明らかになった。被害意識の強さは加害意識を強め、加害意識の強さは被害意識を強めるのである。

ズレ得点からは、一般大学生の多数（164/227, 72.2%）は加害意識よりも被害意識の方をより強く意識化しており、加害意識をより強く意識化している者は少数（51/227, 22.5%）であった。この結果は高校生のデータ（鈴木, 2000）と同じであり被害意識優位の者が多数（136/207, 65.7%）、加害意識優位の者は少数（60/207, 29.0%）であった結果と、ほぼ一致していた。

また、重回帰分析の結果から、自己信頼感の役割が、被害意識と加害意識とは逆になるという興味深い結果が得られた。自己信頼感の高さは、被害意識を強めるが、同じ自己信頼感の低さは加害意識を強めるのである。このことは、本来、被害意識と加害意識とはコインの裏表のように並存しているにもかかわらず、一般的には加害意識は地となって意識化されず、凶となるのは被害意識である。これは自己信頼が高いと自分が他者に対して加害的であるような側面を意識せずにいられることを示唆する。逆に、自己信頼感が低いと、自己の加害性を無視できず、凶となって意識化されるのではないだろうか。また、ズレ得点H群のCD-RISC リジリエンス尺度得点の高さを考えると、ズレ得点H群（被害認知群）では、加害的な意識はある瞬間意識され不安を高めてもすぐに回復され、あたかも自己の加害性は存在しないかのようになりやすいとも考えられる。これに対して、ズレ得点L群（加害認知群）では、自己の加害性が凶となって意識され

やすく、かつリジリエンスの低さからその思いは回復されにくい状態にあるのではないかと考えられた。

なお本研究には、用いた被害意識・加害意識尺度の測定内容が、嫌な気持ちにさせられる、嫌な気持ちになるといった感情面のみであり、それによって排除する、排除されるといった恐れ の側面には焦点があてられていないという限界がある。それゆえ、対人恐怖症のクライアントが示す被害意識や加害意識と同じ質を測定しているとは言いきれないであろう。今後は、感情面と恐れや不安の側面を測定しうる尺度を用い、さらなる研究が望まれる。

## 引用文献

- 天貝由美子（1995）高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究 43（4），364-371.
- Connor, K. M., & Davidson, J. R. T. (2003) Development of a new resilience scale ; The Connor-Davidson resilience scale (CD-RISC) . Depression and Anxiety, 18, 76-82.
- 藤縄 昭（1972）自我漏洩症状群について 分裂病の精神病理1 東京大学出版会 33-51.
- 秦一彦（1990）敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究 61（4），227-234.
- 林 洋一・小川捷之（1981）対人不安意識尺度構成の試み 横浜国立大学保健管理センター年報 1，26-46.
- 笠原嘉ら（1984）正視恐怖・体臭恐怖－主として精神分裂病との境界例について－ 精神病と神経症 2 みすず書房 697-827.
- 加藤 敏・八木剛平（2009）レジリエンス-現代精神医学の新しいパラダイム- 金原出版
- 宮岡等・阿部裕美（1990）自己臭恐怖 臨床精神医学 19（6），877-881.

鈴木 乙史

- 宮本忠雄・鬼澤千秋（1985）対人恐怖と精神分裂病 精神科 MOOK12  
対人恐怖症 金原出版 51-60.
- 町沢静夫・佐藤寛之（1991）境界型人格障害の下位分類の試み 精神医学  
33(11), 1201-1209.
- 中里 均（1986）自己臭の臨床 精神科 Q & A 森温理・長谷川和夫（編）  
金原出版 245-247.
- 西園昌久・井上隆則（1998）自己臭恐怖 臨床精神医学 17（2）, 197-  
202.
- 小塩真司他（2002）ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性  
－精神的回復力尺度の作成－ カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 佐々木淳・丹野義彦（2005）大学生における自我漏洩感を苦痛にする要因  
心理学研究 76（4）, 397-402.
- 菅原健介（1984）自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の  
試み 心理学研究 55（3）, 184-188.
- 鈴木乙史（2000）青年期の被害意識・加害意識（1）高校生を対象として  
日本心理学会第64回大会発表論文集
- 鈴木乙史（2005）自己臭恐怖 存在しない臭いへの恐れ 心理学ワールド  
28, 17-20.
- 田中健滋（1993）対人恐怖における加害意識と被害意識について 精神医  
学, 35（6）, 597-604.
- 内沼幸雄（1985）羞恥と対人恐怖 精神科 MOOK12 対人恐怖症 金原  
出版 106-116.